

「関係の相互性」についての精神分析的理解

— 他分野の「関係の相互性」研究を手がかりに —

村井 雅美

1. 問題提起と目的

(1) 「関係の相互性」とは

「関係の相互性」とは、二者以上の間柄において互いに作用しあうことである。人間には、他者との「関係の相互性」が不可欠であることは言うまでもない。生まれる前から、そして生まれた後も、我々が命の営みを継続し、人間らしく生き、その一生を終える上で「関係の相互性」は極めて重要である。

「関係の相互性」は、哲学者の中村雄二郎（1992）が現代社会において見失われているものとして「生命現象」とともに挙げた言葉でもある。近代科学によってもたらされた知識や技術に支えられて生活を営んでいる我々が、それと気づかぬうちに見失ってしまったものであると述べた。科学は、事象のある側面を選び取り、整え分析し、その因果関係を一義的に捉えようとする。しかし現実には、複雑で多義的で深層的で、相互関係の中にある。近代科学により無視され排除されてしまった人間の営みの多義的側面を捉えて「関係の相互性」と表現した。

(2) 目的

人間が生きていく上で他者との「関係の相互性」は極めて重要であるが、現代社会においては残念ながら、人と人との「関係の相互性」は自明のこととして忘れ去られているか、軽んじられているか、あるいは見失われているかと中村（1992）は述べた。現代社会において「関係の相互性」は何らかの要因によって不全状況や不備に陥りがちであり、人々はそのことによって、より多くの生きづらさや困難を抱えることになっていると考えられる。では人はどのような「関係の相互性」を体験することでその一生を支えることができるのか、形成することができるのか。すなわち、人は生きていく上でその時々において困難に見舞われるが、その困難に立ち向かうためのこころの基盤はどのように形成されるのか。またどのようにして個人の中にある「関係の相互性」の諸相を捉えて、こころの発達や成長に活かすことができるのか。

以上の問題について考えるために、本論ではまず人のこころを援助するための数多の心理療法の理論の中でも、転移・逆転移に着目する精神分析の考え方を取り上げた。なぜなら転移・逆転移は、精神分析や精神分析的な心理療法を行う上で最も基本的で要となる概念であり、実際の臨床場面での「関係の相互性」はこの概念を抜きには考えられないためである。次に、異なる観点から「関係の相互性」の諸相を捉えるために、人間を探究する他分野における「関係の相互性」の研究の成果を参照した。その上で精神分析的理解における転移・逆転移について再

検討し、精神分析的臨床における「関係の相互性」について試論を述べた。

2. 「関係の相互性」と精神分析

(1) 各分析家における転移・逆転移の定義

物や価値などの移動を意味する日常語であった転移という言葉は Freud, S. が用い始めたのは 1895 年のことである。Freud にとって転移は、個人が他との間で繰り返す関わり方を意味し (Gill, 1982)、“生来の素質と幼少期に背負わされたさまざまな影響との共同的作用によって”獲得されたその人自身のやり方、言わば繰り返し印刷される“印刷原版”の現れである (Freud, 1912) と考えた。分析状況の中で治療者に対して現れる転移は量的にも質的にも特殊で、患者の他との関わり方の意識的、無意識的両方のあり方が転移には含まれるとした。一方 Freud, S. にとっての逆転移は、患者の影響による治療者の側の無意識的葛藤を意味し、その情緒的反応はすべからず克服すべきものとして捉えた (Freud, 1910)。こうして Freud, S. によって打ち出された、分析状況における転移と逆転移は、患者の他との関わり方を詳細に観察可能にする現象として、つまり“分析者の手の届くところに再現されてきたもの” (前田, 2014) としてその臨床的重要性が増していった。

精神分析の鍵概念となった転移・逆転移についての研究は膨大な数にのぼり、時代や学派によってさまざまに定義されるようになっていく。Freud, S. 以後の精神分析の分野で重要な思索の流れを創っていった主な分析家達の定義は次のようなものである。

Freud, A. にとって転移とは、“患者が分析家との関係において経験するあらゆる衝動のことを意味した。それらは、客観的な分析状況において新たにつくり出されたものではなく、その源泉は早期の一おそらく、乳幼児期の一対象関係にあるのであって、それが現在ただ反復強迫の影響のもとに復活したものにすぎない” (Freud, 1966) と考えた。そして転移・逆転移を“過去の無意識的な抑圧された対象関係が付け加えられることによって、現実の患者—分析家関係に生じる歪曲” (Freud, 1968) であると理解した。

Klein, M. は、転移を“最早期段階において対象関係を決定づけていたと同じ過程の中で生まれる” (Klein, 1952) と考えて、過去の再演としてだけでなく、今まさに分析のこの瞬間での無意識的幻想の表現であると考えた。つまり“患者は彼が過去に使った同じ方法によって、分析家に対して再体験している葛藤や不安を取り扱っているにちがいない” (Klein, 1952/ Hinshelwood, 1989) とした。一方逆転移については従来の考えを踏襲し、治療の進展を妨げるものとして捉えた。

Winnicott, D. W. (1960) の場合、転移は、最早期の母親環境の失敗に対して形成された患者の反応が分析状況に再演されたものであった。患者は、かつて自分が得られなかった母親の機能に出会うために分析状況を用いると考えた。一方逆転移は、分析家個人の患者に対する転移と、患者の人格と行動に反応して生じる分析家の愛と憎しみの反応があり、分析家は区別して意識することの重要性を説いた (Winnicott, 1947)。

Sullivan, H. S. (1940) は、他者との関係性の文脈の中でパターン化された体験様式が治療関係に現れるものとして転移を考えた。すべては“対人関係的なもの、すなわち人々がお互いの間で何をするのかに焦点を当てて強調した” (Greenberg & Mitchell, 1983)。逆転移は、“患者と分

析者の相互交流から生じる当然の産物”であり、“転移の共同制作者”として、患者の関係性のパターンを理解するために、治療者がとる態度や応答などを指した (Greenberg & Mitchell, 1983)。

(2) 転移・逆転移と「関係の相互性」

Freud, S.以後、個人中心の一者心理学から、治療者と患者との関係そのものを中心にみていこうとする二者心理学への動向が生まれ、精神分析において治療関係の中の「関係の相互性」を重視する動きがみられるようになった。転移についての理解の深まりとともに、逆転移が精神分析家達の関心を引くことになり、“治療が人間関係であることがますます理解されるようになったこと、および精神分析の領野が広がり (小児や精神病患者の分析など)、これらの場合には分析者の反応がより多く重要視されるようになった” (Laplanche & Pontalis, 1967) ためである。

そこで現代精神分析の主たる学派が転移・逆転移と「関係の相互性」をどのように捉えているのかについて、「自我心理学」、「対象関係論」、「関係性精神分析」の三つの観点を取り上げた。

a) 自我心理学

Freud, S.に始まり Freud, A.や Hartmann, H.に引き継がれた自我心理学においては、“患者の分析者に対する関係をほとんどすべて過去からの置き換え (転移)”とみなした (Greenberg & Mitchell, 1983)。転移は、患者の発達史によって規定された幼児的な葛藤を現在の分析状況に再現する。そして逆転移は、分析家の患者の転移に相当する態度として理解され、常にその逆転移感情は克服すべきものとして捉えられている。ここでの患者の転移と分析家の逆転移との関係は、二者性を帯び双方向に影響を与えあいながら生成されるものというよりは、患者のもつある特徴が分析状況に現れ、時として分析家の逆転移の契機になっているだけであると捉えられている。実際、分析状況の中では転移を通して患者が過去を生き直すことに重点がおかれた (Hartmann, 1951)。

b) 対象関係論

Klien, M.に始まる英国対象関係論は、あくまでも内的対象関係という、治療の中で繰り上げられる無意識レベルでの“相手との相互関係” (前田, 2008) に着目した。そして Heimann, P. (1950) によって、分析状況が“二人の人物の関係”であり、治療者の逆転移の一面は、患者のパーソナリティの一部に対する情緒反応として現れ、患者の無意識への手がかりとして治療に最も重要なものであると論じられた。Bion, W. (1959/1962b) は更に、治療者と患者間に起こる相互性、つまり転移・逆転移関係を、投影同一化という概念を用いて解明しようとした。母親は泣いている赤ん坊の苦痛を一旦自分に実際に取り入れて感じ取り、更に可能であれば、何が問題でどうすることが良いのか考え、その苦痛を理解しようとする。母と子の間に起きるこういった相互作用を、“正常な度合いの投影同一化があり、取り入れ同一化と連合して、これが、正常発達が頼みとする基礎であると想定” (Bion, 1959) した。この自分の苦痛を理解されたという体験が、赤ん坊の中で今度は体験を理解するという能力を持つ対象関係の獲得につながっていくこと (Hinshelwood, 1989)、それはまた同じように治療者と患者の治療関係にも起こる相互作用だとした。

c) 関係性精神分析

Sullivan, H.に始まる対人関係論においては、“現実の母子関係を中心とした重要な人物との対人関係の発達を問題にした” (Mitchell, 1988)。対人関係の場を考慮せずに人の存在は考えられ

ないとした (Stern, 1997)。その流れを汲む Mitchell, S. は Greenberg, J. との著書 (1983)の中で、他者との関係が人の精神生活の基本的要素であるという「関係基盤 a matrix of relationships」と呼ぶ概念を打ち出し、我々が、欲動ではなく、“他の人々との関係性の基盤 a matrix of relationships”によって形づくられ、避けがたくそのなかにはめ込まれ、他者とのきずなを維持し、かつ他者から分化しようともがいているものとして描かれる”(Mitchell, 1988)と述べた。こころは“根本的に2者的な dyadic もの、相互作用的なもの”であり、“他のところとのふれあい、かかわり合いを求めている”ものとみなされた(Mitchell, 1988)。このような考えの中での転移・逆転移は、現在の分析者との相互作用の中で、患者独自の、過去の人物ではなく、目の前の人と関わろうとするやり方とそれに対する分析家の反応、その現実の交流の中で生まれるものと、患者がその場に持ち込んでくるものとで構成される複雑な混合物であると考えられた。

(3) 「関係の相互性」と精神分析的理解に基づく治療モデル

このように精神分析においては、「関係の相互性」を捉える転移・逆転移の理解が欠かせないものとなった。と同時に、その理解が人間の本質に関する見解を左右し、延いてはこころの治療技法論にも影響して異なる見解を生み出すことになった (Greenberg & Mitchell, 1983)。治療状況には、そこに繰り広げられる転移・逆転移、つまり患者と治療者それぞれがそこに持ち込んでくる内的なものとその交流 (対象関係の相互性)、それぞれの主体が他者との現実の交流の中で編み出すものとその交流 (対人関係の相互性)、そしてその双方の混合物から生成されるものが考えられ、その状況の何を重点的に見るかはその治療者の姿勢によっている。

自我心理学による治療モデルでは、患者は病因となる葛藤を内に携えて治療にやってくると考える。ここでの外界、つまり分析者は、“ブランク・スクリーン”であり、その治療の目的は、患者の葛藤を明らかにし、無意識を意識化し、過去からの転移によって歪曲された分析者に対する関係を修正することにある。

対象関係論では、正常な投影同一化と病的なものを分けて考える視点が Bion, W. (1962a)によってもたらされた。母親が赤ん坊の苦痛を自分のところの中に取り入れ、理解しようとし、あやし、そして恐怖を和らげるころの状態を“もの想い reverie”と呼び、治療状況に転移される患者の恐怖や不安を理解しようとする際の治療者のころの状態、機能を示した。そして病的な投影同一化による患者の経験を治療者自身のころにコンテインし、“もの想い”し、理解を解釈という言葉で届けることが治療モデルとなった。

関係性精神分析では、“心理学的現実を眺めるもっとも有用な方法は、精神内界領域と対人関係の領域の両方を囲い込むような関係基盤のなかで作用しているとみなすことである”(Mitchell, 1988)と考えて、治療者の役割は、患者の内的世界を明らかにすることだけでなく、患者の内的世界が展開し、複雑な現代社会を生きていくための個人的な価値観と意味を創造する手助けをすることだとした。そこには“実際の他者と内的な存在としての他者との関係における調整方法の探索を必要”(富樫, 2011)とし、その探索を可能にする治療者の在り方が強調されている。

3. 他分野における「関係の相互性」

(1) 哲学と「関係の相互性」

人間にとって重要な問題を根本原理から考える哲学において、「関係の相互性」について思索を行ってきた哲学者は数多い。中でも中村雄二郎（1992）は現代社会において、科学の発展の影に追いやられ、科学的見方の中に見失われたものとして「関係の相互性」を挙げた。

科学は、客観的に物事を捉え、論理的、普遍的にそれらについて考えることを求める。それは、誰が試みても同じような結果を得られるという点で説得力があり、ある程度の期間、持続性をもって真理であると認識されるものである。しかしながら、例えば天動説と地動説の例にみられるように、ある時代には真理であると信じられているものが、次の時代にはそうではないことが発見されたりして、科学というものが、実際には歴史の中にあり、人々にある程度共有されているモノの見方にしか過ぎず、時代を超えての真実を示しているとは言えないことがわかってきた。そして観察する側と観察される側が生まれ、その間に横たわる冷ややかな断絶とともに、そこに本来含まれる多様な相互作用が見失われてしまう危険性を孕むようになった。人間は自然からの脅威を恐れ、自然を支配しコントロールしようと、例えば川をコンクリートで整備するが、その為に閾値を超えた水量は氾濫し、災害となって人間に返ってくる。人間同士の関係も、人間と自然の関係も、一方的にこちらから働きかけたつもりでも、相手からの想定外の反応が返ってくることまで考えが至らない。あるいはそういった考えを無視しようとする。ある働きかけをすれば、必然的に様々な反応があり、相互作用が生じる。そういった「関係の相互性」を捉える“知”を中村（1992）は求めた。

<コスモロジー><シンボリズム><パフォーマンス>と名付けられた要素を含む“臨床の知”という方法論は、中村(1992)が<科学の知>に代わるものとして提唱した方法である。人間が関係する出来事を包み込む場所と空間の有意義性や質を現す<コスモロジー>、1つ1つのモノが持っている意味の多面性、多義性を現す<シンボリズム>、人間が行為、行動を起こすときに発生する様々な相手との相互作用を現す<パフォーマンス>。このどれもが、生きている人間が対象と関わりをもつ際に生じるものであり、表層の現実の背後に隠されている多義的意味を浮き彫りにし、考える方法である。そこに生まれる個別のドラマを考えようとする。例えば、一見何のとりえもない古びた肘掛け椅子を見て、ある人にとっては特別な意味が立ち現れ、時空を超えて、肘掛け椅子にかつて座っていた大切な人との情景と情緒が浮かぶ。そういった象徴的意味を考えることが、人が生きていく上で大切であると中村は説く。そして言語の象徴的機能を用いて考えることが重要であると指摘した。つまり“臨床の知”として中村によってモデル化された方法は、事象が起こる個々の場所や空間を、有機的な意味ある宇宙とみなし、多義的・深層的に、個人が相手や環境からの働きかけをどのように能動的に内に受け入れ行動するかという相互交流の中で事象を捉える方法である。近代科学の考え方にとらわれ、縛られるのではなく、人間本来の「生命現象」や「関係の相互性」に目を向ける必要がある。そのことが、人間が生きていく上で不可欠であり、人間の基盤となり、人間本来のあり方を回復する営みであると中村(1992)は説いた。

（２）社会学と「関係の相互性」

オーギュスト・コントに始まる社会学は、これまで自然科学の方法をモデルとして、観察できる事象の中にある法則を見出すことをその目的としていた。現実の社会における事象を数値化し統計処理し、因果関係を明らかにし、客観性を重視してきた。しかし近年、そういった実

証主義の中で人間と社会を理解しようとするのではなく、異なった方法論を模索する動きが出てきた。科学や技術によってもたらされた現代社会の諸相が、原発事故や、自然破壊、環境汚染、テロリズム、人間関係からの孤立など、過酷で危険に満ちた「リスク社会」(Beck, 1986)に陥ってきたためである。

例えば「シンボリック相互作用論」の名付け親である Blumer, H. (1969) は、当時の社会学からあまりにも標準化されていないと排除されていた、人間の経験世界に着目した(船津他, 1995)。個々の人間はものごとにある意味付けを行い、それに基づいて行為するものであり、その意味付けは、その個人と相手との社会的相互作用過程において生成される。そして、そうした意味付けは、ものごとに対処する際にその個人の中で解釈され、その解釈に基づいて自己の行為を形成するとしている。個人が生活している世界は、独自の意味を付与された世界であって現実の世界とは区別する必要がある、人間と人間が作り出す社会は、活動的・流動的な相互作用から成り立っている。その現象をシンボルによって捉えようとした。

Giddens, A. (1993) もまた、“人間の社会的活動と相互主観性に関心をよせる”はずの社会学が、その実、人間の活動の中核となる自己意識をほとんど評価せず、当てにならないものとして邪魔もの扱いしてきたことを指摘した。そして“理解とは、それ自体が社会における人間生活の存在論的条件に他ならない”として、自己を理解することと他者を理解することは不可分に相互の関係にあるとした。自己のおこなうことがらを理解することは、他者のおこなうことがらを理解することを通してのみ可能であり、また他者のおこなうことがらを理解することは、自己のおこなうことがらを理解することによってのみ可能となる。そして、自己や他者を理解できるようになるということは、言葉によって記述することで可能となる。つまり、人間の社会行動を「理解する」という方法論は、言葉による解釈を必要としていると述べた。

船津(2014)は、Giddens, A.や Blumer, H.らの考えを受けて、次のように述べている。“人間の理解において、自然科学的、機械論的見方によって意味、主観、意識などの内的世界を無視することは、人間の特質を見ないことになり、人間行為と人間社会の理解が不十分なままに止まることになる。人間行為と人間社会を十分に理解するためには、人々の意味、主観、意識の果たす役割を重視し、人間の内的世界の解明が行われなければならない”として、人間の意味・内的世界が、他者との関係において、つまり社会性をもって形成されるものであり、その形成の過程を解明することの重要性を説いた。そして、「内省」(reflexivity)することによって、意味・内的世界が変容し、すなわち内的な相互作用によっても自分自身の中の変容が起こり、それが他者や社会との関係にも変化をもたらし、その変化がまた個人に返ってゆくという相互作用の中で、新たなものを生み出し、今日の「リスク社会」を乗り越えることができるのだと示唆した(船津他, 2014)。

田中(1996)もまた、現代日本社会の在り方を憂え、“わたくしたちが直視しなければならないのは、高度情報化、消費社会化、管理化の下での現代日本の社会諸関係が、その「豊かさ」の外観の背後に、どうしようもなく無機質化し、没意味化し、非人間化した社会関係の地平を広く伸張り、日々に増殖しつつあるという客観的事実である”と述べて、従来の「個人と社会」の問題を因果論的に捉えるのではなく、「関係」主義の視点から社会学を捉え治そうとした。すなわち、自然界の階層性の中に、生きる主体としての「個人」があり、その「個人」が集団や

社会の中で“関係のアンサンブル”（田中, 1996）を幾重にも奏でながら相互に影響しあう。現代の日本社会は、しかしながら、各々の「個人」の肉身的自然、《生命》が吹き込まれたためくもりとあたたかみのある関係が失われていて、chiasm されず、身体感覚を伴った《生命》と環境世界との関わり合いの再構築が必要であるとした。そして《対象関係（relation libidinales d'objet）》の広がりにも注目することの重要性に触れている。

（3）比較行動学と「関係の相互性」

第二次世界大戦後の日本における比較行動学、特に霊長類の研究は、野生のニホンザルのコミュニケーションに焦点を当てた。その社会の成り立ちと文化的行動を解明することによって、人間の社会的、文化的起源や在り方を探究することに生かそうとした（山極, 2009）。それは、つまりコミュニケーションという個人同士でなされる相互交流は、遺伝的に私達個人の中に受け継がれているからなされているというだけでなく、次世代の子ども達がそれをまた行動として現せるように働きかけることができる刺激そのものを内包しているということである。コミュニケーションは人間にとって生得的なものであるが、単に与えられるだけのものでもなく、自ら積極的に環境から引き出し、受け取るものであり、その社会的刺激の相関によって、どのようにその個人が発達していくかが影響される。そういった「関係の相互性」を捉えた研究が、霊長類の研究の中に見られる。

例えば南（1977）はリーサスザルを用いて、生後初期の段階から、母や同種の個体との接触が遮断された場合に、子ザルにどのような影響があるかを調べた。そして、特に母ザルと隔離された子ザルには、指しゃぶり行動、体を抱く行動、体ゆすり行動などの常同行為と呼ばれる異常な行動の反復がみられること、その常同行動の行動型は、母親との隔離が子の成長時期のいつであったかによることを示唆した。母ザルの不在による身体接触の欠如が、子ザルの成長、成熟に密接な関連のあることを示し、人間のこころに対する理解に貢献することができるとした。つまり、母ザルと隔離され身体接触をもてなかった子ザルは、本能的な接触の欲求を自分のみで満たさなければならず、常同行為を発現させ、その行為に固着することによって、その欲求を満たそうとする。そして、そのようにせざるを得なかった子ザルは、社会性に欠損がみられ、新しい環境に適応する能力が低くなることが明らかになったとしている。

一方、中道（1996）は、サル類の母子関係の論文から、長期にわたる縦断的観察で得られた「子育て」の姿を導き出している。その特徴として、生後直後の母子の密接な関係は、生後 1 年を終える頃には、かなり疎遠になり、それ以降も 4 年の間に徐々に疎遠になっていく傾向が全体的に見られること、個々の母子間の関わり方の密接度は、それぞれの母子間で 4 年間を通してほぼ一定であることを挙げている。その子育てのスタイルは踏襲される傾向にあり、「育てられたように育てる」、あるいは「見たように育てる」ことで、次世代に伝達されることが判明している。しかしながら、「子育て」のスタイルの柔軟性が全く失われている訳ではなく、状況に応じて母ザルがそのスタイルを変化させることを、重度奇形や重度障害を負った子ザルに対する母ザルの対応から見て取ることができるとしている。そして今後、母ザルから子ザルへの働きかけのみならず子ザルから母ザルへの働きかけを含めて、母子相互作用を理解していくことが重要であると指摘している。

このような相互作用を含む行動を研究するのにふさわしい方法として、糸魚川（1998）は、

科学的手法にとらわれず、“個体をできるだけ「長く」、「幅広く」とらえ、さまざまな個体について、その生き方を「公にとらえ」、その生き方を「自由な発想によって比較する」こと”を提言している。

そして上原（2006）は、人間関係が人間の命の営みの全過程に深く直接的に結びつき、それなしには人間というものが成り立たないという視点を、野生のニホンザルを対象とする霊長類研究の中に見ている。霊長類も人間も子ども期が長い生物であり、生命の誕生からその維持と成長に他の個体や他者が必要であり、その関係の有無が個体の生存の決定的要因とならしている。そして誕生の瞬間から、栄養を取ること、動くこと、着ること、安全に過ごすこと、愛情を受けること、また成長期に必要な知識や技術、特性を獲得すること、全てに他者との関係を必要としていて、文化的特性も人間的特性もその関わりの中で受け継がれて行く。それは親子の関係において為される場合もあれば、身近な環境が親に代わって、その伝承の役割を担う場合もある。幼児期には幼児期の、青年期には青年期の、成人期には成人期の、老年期には老年期の人間関係に出会うことがその人生において必要である。生涯を実現していく上で、基本となるものであると述べている。

4. 考察

本論文ではまず、人のこころを援助するための心理臨床の中から特に精神分析／精神分析的な心理療法を取り上げ、「関係の相互性」が重要視されるようになった経緯を転移・逆転移概念を通して概観した。“相互の関わりを無視して臨床などできないもの”（前田，2008）である。人が他者のこころを援助するという心理臨床実践は、治療者と患者二人の関係であり、その「関係の相互性」に着目し、そこで何が生じるかを共同で吟味することは必須である（成田，2008）。なぜなら人のこころを援助する際には、治療者は生身の自分のこころを用いなければならず、その関係の有り様を抜きに援助することは不可能であるからである。

次に人間の営みを研究対象とする他分野がどのように人間の「関係の相互性」を考えてきたかを概観した。どの学問分野も従来の科学的手法によるアプローチだけでは飽きたらず、新しい探究方法を模索していたことは発見であった。人の生命は「関係の相互性」をもって育まれる。そのあまりにも自明の事柄を我々はもう一度見つめ直そうとしているようである。哲学者、中村（1992）は、人の＜現実＞の多義的側面である「関係の相互性」を捉えるために＜臨床の知＞の原理を提言した。人と人との関わりという営みを内包する場所と空間が織りなす意味、1つ1つのモノが持つ意味の多面性と多義性、そして人が行為、行動を起こす時に生じる相手との相互作用。これら3つの重奏性を、言葉を用いて考えることが、人間本来の在り方、基盤となる「関係の相互性」を考える縁（よすが）となることを示した。社会学においては、現代の「リスク社会」を乗り越える為に、経験世界・内的世界をもつ自己が他者との関係である社会性をもって形成される過程について、言葉で解明する必要があると提言された。そして個人の内的対象関係は他者や社会との関係によって変化するものであるとして、あたたかでぬくもりのある関係を取り戻すための環境世界との相互作用が必要であるとした。比較行動学では、特に霊長類の研究において、個体の生存と発達に必要なコミュニケーションという相互交流が、遺伝的に世代間で伝達されるだけでなく、次世代の子ども達がまた行動として発現できるよう

に働きかける刺激をも内包していることを示した。

最後に、精神分析における転移・逆転移概念および人間のこころの現実を哲学、社会学、比較行動学における「関係の相互性」の観点から再検討する。中村（1992）の「臨床の知」は、実に心理療法の場面設定、すなわち治療構造とそこに凝縮される患者と治療者の有り様を示している。幼少期から形成された心的対象関係は、固定に設定された空間と時間の中で、治療者との間の患者の言動、振る舞いに再演される。そして治療関係の中で治療者の働きかけを患者はどのように受け入れ、反応し行動するのか。またその反応を受けて、治療者はどのように治療的に働きかけるのか。相互交流の中で眼前に立ち現れる事象を捉え、患者のこころを考えるのである。社会学の示した関係主義の視点からは、まさに精神分析的心理療法の中で、実際に患者と治療者が出会い、治療者が患者の内的世界を理解しようとし、そして届けられた言葉に含まれる治療者のこころと理解によって、患者のこころが和らいでいく過程に酷似している。比較行動学が示した生存と発達に必要なコミュニケーションという視点は、精神分析的心理療法の中で患者が、自身の抱え持つ苦しみと心の痛みを理解されたいという根源的な願いが耐えることなく存在し、それらを転移によって治療者に伝え、治療者に逆転移を引き起こし、こころの発達と成熟に必要な理解というものを治療者から引き出そうとする試みに類似すると考えられる。

精神分析のみならず、人間の営みを研究対象とする他分野においても「関係の相互性」の重要性が指摘されていた。「関係の相互性」こそが、人の一生を支えるこころの基盤となる。精神分析的状况における「関係の相互性」、それは転移・逆転移として捉えられるが、そこには患者と治療者の関わり合いの諸相が立ち現れる。その中には、患者が他との間で繰り返す関わり方、治療者の動きに対して応じる患者の対象への関わり方、自分が出会えなかった母親の機能に出会うために治療状況と治療者を用いる方法など、患者が無意識に働きかける内的対象関係の様相が含まれる。患者の内的世界は治療空間の中に繰り広げられ映し出される。転移が起きる。治療者もまたその患者のこころの世界の一部となる。と同時に治療者は患者の内的世界がどういうものなのかを知り、その世界に組み込まれることによって引き起こされる治療者自身の逆転移を感知する必要がある。その中に援助を必要としている患者からの重要な“無意識のコミュニケーション”（Casement, 1985）が含まれているからである。加えて、現実の治療者と患者の関わり、つまりそれぞれのパターン化された他者との体験様式が織りなすものも面接状況に含まれる。筆者は、この転移・逆転移に、患者の現実体験の理解を加味すべきであると考え。それぞれの患者のこころを理解するための鍵となる現実体験が必ず存在する。転移・逆転移によって治療者のこころに届けられ、保持され、吟味され、情緒をともなって理解され、その理解が伝えられる時、患者のこころに変化が起きる。その現実体験は、例えば先天性股関節脱臼の治療を受け動けない期間があったことであったり、てんかんを患っていることであったり、手術を受けたことであったり、保育器に入っていたことであったりする。そういった個々の患者にとっての最も重要な現実体験が、治療者と患者の「関係の相互性」に持ち込まれる瞬間こそが、両者の間に理解が生じ、理解されたというこころの基盤が患者の中に生じる瞬間なのではないかと考えている。

成田（1997）は、心理療法における治療者-患者関係は二重性を帯びているとして、意識的、

現実的、理性的、現在の治療者-患者関係の枠組みの中に、無意識的、空想的、情緒的、通時的関係が濃縮されて現れてくると述べている。職業的・契約的關係の治療構造の中に、個人的・転移／逆転移関係が発展し、丁度舞台の中のドラマの展開のようであるとした。この二重性の中に「関係の相互性」があり、そこに情緒的理解と愛しむことが含まれる。そこに人のこころの基盤があると考えている。

5. 今後の課題

精神分析的心理療法における患者と治療者の営みは、「関係の相互性」を織り成しながら人のこころに生きる目的を見出し、苦悩する人びとの“道行を支える”(東中園, 2008) 取り組みにつながると考えられる。今後の課題として、生きづらさや困難を抱える患者の「関係の相互性」の状態、個人を支えるその基盤が危うい時あるいは揺らぐ時、親密な他者との間で「関係の相互性」を培う可能性、患者の苦悩の状態に対しての治療可能性や限界について、「関係の相互性」の諸相を吟味しつつ、精神分析的心理療法を行った事例を基に更なる考察を深めていくことがあげられる。

謝辞：本論文作成にあたり、ご指導頂きました高橋靖恵先生に深謝いたします。英文は、英国精神分析協会精神分析家 Inge Wise 先生に御高覧頂きました。ここから感謝申し上げます。

文献

- Beck, U. (1986). Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne. [東廉・伊藤美登里 (訳) (1998). 危険社会. 法政大学出版局.]
- Bion, W. (1959). Attacks on Linking. *International Journal of Psycho-Analysis*, **40** (5-6), 308-315; republished (1967) in *Second Thoughts*, pp.93-109. [中川慎一郎 (訳) (2007). 連結することへの攻撃. 松木邦裕 (監訳) 再考-精神病の精神分析論. 金剛出版.][中川慎一郎 (訳) (1993). 連結することへの攻撃. 松木邦裕 (監訳) メラニー・クライン トゥデイ①. 岩崎学術出版社.]
- Bion, W. (1962a). A Theory of Thinking. *International Journal of Psycho-Analysis*, **43**, 306-310; republished (1967) in W. R. Bion. *Second Thoughts*. Heinemann, pp. 110-119. [中川慎一郎 (訳) (2007). 考えることに関する理論. 松木邦裕 (監訳) 再考-精神病の精神分析論. 金剛出版.][白峰克彦 (訳) (1993). 思索についての理論. 松木邦裕 (監訳) メラニー・クライン トゥデイ②. 岩崎学術出版社.]
- Bion, W. (1962b). *Learning from Experience*. Heinemann. [福本修 (訳) (1999). 経験から学ぶこと. 福本修 (訳) 精神分析の方法 I-セブン・サーヴァンツ. 法政大学出版局.]
- Blumer, H.G. (1969). *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice - Hall, 1969.[後藤将之 (訳) (1991) シンボリック相互作用論-パースペクティブと方法. 勁草書房.]
- Casement, P. (1985). *On Learning from the Patient*. [松木邦裕 (訳) (1991). 患者から学ぶ—ウィニコットとビオンの臨床応用. 岩崎学術出版社.]
- Freud, A. (1966). The Ego and the Mechanisms of Defense. *The Writings of Anna Freud*, 2:

- International Universities Press. [黒丸正四郎・中野良平（訳）（1982）自我と防衛機制. アンナ・フロイト著作集 2, 岩崎学術出版社.]
- Freud, A. (1968). Acting Out. *The Writings of Anna Freud*, 7: 94-109. International University Press: New York. [佐藤紀子・岩崎徹也／辻祥子（訳）（1982）. 行動化. アンナ・フロイト著作集 10, 岩崎学術出版社.]
- Freud, S. (1895). With Breuer, *Studies on Hysteria*. Standard Edition, 2. Hogarth Press: London. [懸田克躬、小此木啓吾訳(1974). ヒステリー研究. フロイト著作集 7, 人文書院.]
- Freud, S. (1910). The Future Prospects of Psycho-Analytic Therapy. Standard Edition, 11: 141-151. Hogarth Press: London, 1957. [小此木啓吾（訳）（1983）. 精神分析療法の今後の可能性. フロイト著作集 9, 人文書院.]
- Freud, S. (1912). The Dynamics of Transference. Standard Edition, 12: 99-108. Hogarth Press: London, 1958. [藤山直樹（編・監訳）（2014）. 転移の力動. フロイト技法論集. 岩崎学術出版社.]
- 船津衛・宝月誠（編）（1995）. シンボリック相互作用論の世界. 恒星社厚生閣：東京.
- 船津衛・山田真茂留・浅川達人（編著）（2014）. 21 世紀社会とは何かー「現代社会学」入門. 恒星社厚生閣.
- Giddens, A. (1993). *New Rules of Sociological Method-A Positive Critique of Interpretative Sociologies-* (2nd Ed.). Blackwell Publishers; London. [松尾精文他（訳）（2000）. 社会学の新しい方法基準 第二版. 而立書房.]
- Gill, M. (1982). Analysis of Transference. Volume I—Theory and Technique. [マートン・M・ギル著 神田橋條治、溝口純二訳 転移分析：理論と技法. 金剛出版, 東京.]
- Greenberg, J. & S. Mitchell (1983). *Object relations in psychoanalytic theory*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. [横井公一（監訳）大阪精神分析研究会（訳）.（2001）. 精神分析理論の展開—〈欲動〉から〈関係〉へ—. ミネルヴァ書房.]
- Hartmann, H. (1951). Technical implications of ego psychology. (1964). *Essays on ego psychology*. International Universities Press: New York.
- Heimann, P. (1950). On counter-transference. *International Journal of Psycho-Analysis*, 31, 81-84. [原田剛志（訳）（2003）. 逆転移について. 松木邦裕（編・監訳）対象関係論の基礎—クライニアン・クラシックス. 新曜社.]
- 東中園聡（2008）. 統合失調症者との治療的コミュニケーションの試み. [松木邦裕・東中園聡（編）精神病の精神分析的アプローチ—その実際と今日的意義. 金剛出版.]
- Hinshelwood, R. D. (1989). *A Dictionary of Kleinian Thought*. Free Association Books: London. [衣笠隆幸（総監訳）（2014）. クライン派用語事典. 誠信書房.]
- 糸魚川直祐・南徹弘（共編）（1998）. サルとヒトのエソロジー. 培風館.
- Klein, M. (1952). The Origins of Transference. *Works of Melanie Klein* 3. [館哲朗（訳）転移の起源. 小此木啓吾・岩崎徹也（責任編集）（1985）. メラニー・クライン著作集 4 妄想的・分裂的世界. 誠信書房.]
- Laplanche, J. & Pontalis, J. B. (1967). *Vocabulaire de la Psychanalyse*. Universitaires de France: Paris. [村上仁（監訳）（1977）. 精神分析用語辞典. みすず書房.]

- 前田重治(2008). 図説 精神分析を学ぶ. 誠信書房.
- 前田重治(2014). 新図説 精神分析の面接入門. 誠信書房.
- 南徹弘(1977). 霊長類における幼体の行動発達と初期母子関係: 常同行動の比較行動学的分析. 大阪大学人間科学部紀要, **3**, 181-205.
- Mitchell, S. A. (1988). Relational Concepts in Psychoanalysis. President and Fellows of Harvard College. [S. A. ミッチェル著 鐘幹八郎監訳 横井公一訳 (1998). 精神分析と関係概念. ミネルヴァ書房.]
- 中道正之 (1996). サル類の子育て. 動物心理学研究, **45**(2), 67-75.
- 中村雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か. 岩波新書.
- 成田善弘 (1997). 役割からの逸脱と再統合. [氏原寛, 成田善弘 (編) (1997). 転移/逆転移—臨床の現場から—. 人文書院: 東京.]
- 成田善弘 (2008). 序文 [Gill, M. (1994). Psychoanalysis in Transition—A Personal View. マートン・M・ギル著 成田善弘監訳, 杉村共英、加藤洋子訳 (2008). 精神分析の変遷—私の見解. 金剛出版, 東京.]
- Stern, D. B. (1997). Unformulated Experience: From Dissociation to Imagination in Psychoanalysis. [D. B. スターン著 一丸藤太郎、小松貴弘監訳 (2003). 精神分析における未構成の経験—解離から想像力へ. 誠信書房.]
- Sullivan, H. S. (1940). Conceptions of modern psychiatry, Norton: New York.
- 田中義久編 (1996). 関係の社会学. 弘文堂.
- 富樫公一 (2011). 関係精神分析の治療と技法. [岡野憲一郎、吾妻壮、富樫公一、横井公一著 関係精神分析入門—治療体験のリアリティを求めて—. 岩崎学術出版社.]
- 上原貴夫 (2006). 人間の「生きる」基本としての人間関係に関する研究—比較行動学の視点からみた人間関係—. 人間関係学研究, **13**(1), 41-49.
- Winnicott, D. W. (1947). Hate in the Countertransference. In Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis. Tavistock: London. 1958. [中村留貴子訳 逆転移のなかの憎しみ. 北山修監訳 (2005). 小児医学から精神分析へ—ウィニコット臨床論文集. 岩崎学術出版社.]
- Winnicott, D. W. (1960). The Theory of the Parent-Infant Relationship. In The Maturation Processes and the Facilitating Environment: Studies in the Theory of Emotional Development. Hogarth Press & The Institute of Psycho-Analysis: London. 1965. [親と幼児の関係に関する理論. D. W. ウィニコット著 牛島定信訳 (1977). 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.]
- 山極寿一 (2009). 日本の霊長類学: 歴史と展望. 霊長類研究, **24**, 183-186.

(臨床実践指導学講座 博士後期課程2回生)

(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

「関係の相互性」についての精神分析的理解

—他分野の「関係の相互性」研究を手がかりに—

村井 雅美

我々人間が生きていく上で他者との「関係の相互性」は極めて重要である。しかし現代社会において「関係の相互性」は忘れ去られ、軽んじられ、見失われている。「関係の相互性」は不全状況や不備に陥りがちであり、人々はより多くの生きづらさや困難を抱えている。本論では、人の一生を支える基盤となる「関係の相互性」を、精神分析的理解に基づいて論じた。患者の「関係の相互性」の有り様、つまり内的世界・対象関係は、一定に堅持される治療構造の中に治療者をも組み込み、転移-逆転移関係として現れる。それは治療関係において援助を求める患者の極めて重要な無意識のコミュニケーションである。治療者はそのことに気づき、その理解を言葉で患者のところに届ける必要がある。更に、他分野において「関係の相互性」がどのように研究されているかを概観し、その見地を参照しながら、転移-逆転移について若干の試論を述べた。

Psychoanalytic Understanding of the Interrelationship between Therapist and Patient: Insights from Other Disciplines

MURAI Masami

The interrelationships between oneself and significant others are crucial for human beings. In modern society, however, knowledge of the importance of interrelationships has been diminished. As a result, increasing numbers of people have hardships and difficulties in daily life. This paper discusses the essential function of psychoanalytic psychotherapy in helping patients to regain the capacity for close interrelationships with the help of the therapist. The patient's inner world and object relations are projected onto the therapist and the psychotherapeutic setting. The transference/countertransference forms an essential part the therapeutic relationship, and is an unconscious communication from the patient. The therapist should recognize what is happening in this setting and deliver understanding to the patient through interpretation. In addition, a review of research on interrelationships in different disciplines is presented. By comparing the approach to such interrelationships, taking insight from these disciplines, the transference/countertransference was examined from a personal viewpoint.

キーワード：「関係の相互性」、転移／逆転移、精神分析的心理療法

Keywords: Interrelationships between a therapist and a patient、 Transference/countertransference、 Psychoanalytic psychotherapy